

よねのトンボ

山形県最上郡鮭川村米地区のトンボ図鑑



この資料は、2015年5月～10月にかけて、各月数日間撮影した写真を元に、分類・整理したものです。2015年に確認したトンボは36種類となりました。これに加え、2013年に確認した1種を紹介しています。捕獲による確認などもしていないため、より厳密な調査を行えば、40種以上が生息しているのではないかと思います。

分類には、インターネットの情報の他、文一総合出版社の「日本のトンボ」を参考にしました。

撮影・制作：青西靖夫 ©Yasuo Aonishi 無断複製を禁じます。

イトトンボの仲間（腹が細くて小さいトンボ）

5月頃から、米の集落内の小堤や池、米湿原の水たまりなどではイトトンボの仲間を見つけることができます。「イトトンボ」と呼ばれるトンボの中には、3つの科のトンボが含まれています。アオイトトンボ科、モノサシトンボ科、イトトンボ科です。

池から生えている草などによく見かけるのが水色のイトトンボ。この中には「オオイトトンボ」、「オゼイトトンボ」、「エゾイトトンボ」、「クロイトトンボ」などが含まれています。

オゼイトトンボ（オス・メス）



エゾイトトンボ（オス・メス）



オオイトトンボ（オス・メス）



見分けるポイント

腹部先端と胸部の模様が見分けるポイントになります。エゾイトトンボは腹部に水色の部分が多いのがポイントになります。メスの体色はオスとは異なります。メスも腹部先端の模様で見分けることができます。

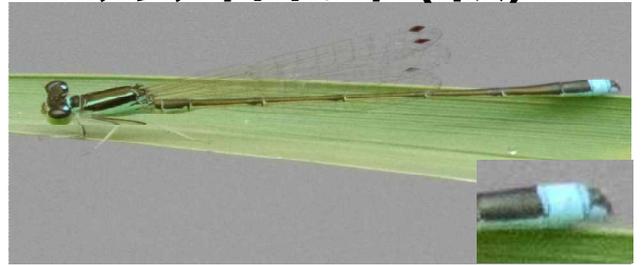
少し遅れて出てくるのがクロイトトンボ。胸部が水色で、成熟すると胸部に白い粉を吹いてきます。腹部は黒く、先だけが水色です。

また10月まで姿をみせるのはアジアイトトンボ。小さいイトトンボで胸部は緑色から水色。

クロイトトンボ (オス)



アジアイトトンボ (オス)



アジアイトトンボ (メス)



モートンイトトンボ (オス・メス)

各地で減少しているイトトンボ。オスは腹部がオレンジ色になります。未成熟なメスはオレンジ色。



キイトトンボ (オス・メス)

他のイトトンボよりも少し遅れ、6月後半から8月にかけて現れます。他のイトトンボより腹部が太い。



イトトンボ科のイトトンボは5月頃に現れ、ほとんど水辺を離れることはありません。オスとメスは交尾の後、多くの場合、連結したまま、水中の植物に産卵します。1年で2世代発生するイトトンボもいます。米地区では、5月～7月に多くの種類のイトトンボを観察できます。

**アオイトトンボ科
アオイトトンボ**

はねを開いて止まっていることが多いイトトンボ。若いときは、胸部が緑色。夏には白くなってきました。6月から10月頃まで観察できます。6月頃は胸が緑色に輝き、水辺を少し離れたヤブの緑などで見かけることも多いのですが、8月ぐらいには水辺に現れ、腹部の先端と胸部も白くなり、複眼も青くなります。水辺の植物の茎に産卵します。



オス

メス



オオアオイトトンボ

アオイトトンボより遅くに現れます。胸部が白くなりません。オスの腹部の先端は一節だけ白くなります。



オツネイトンボ

成虫で冬を越すのですが、10月まで見つけれず。2012年5月に産卵する写真あり。褐色なので区別は容易。



モノサシトンボ科 モノサシトンボ

腹部も脚も長い。オスは脚の白い部分が目立ちます。メスの脚は少し赤みがかったり。水辺を少し離れたヤブの緑などで見かけることが多い。



カワトンボ科

米地区に接する鮭川の流が淀むところに多く生息します。数は少ないですが湿原に向かう林内でも見かけることができます。時々、集落内にも現れます。イトトンボと比べると大型です。

アオハダトンボ (オス・メス)

鮭川の淀みに、6月だけ見つけることができました。翅に光沢があり、メスは、翅の色が薄く、先端に白い紋があります。



ハグロトンボ (オス・メス)

同じ淀みに7月になると現れます。翅には光沢がなく、メスの翅の白い紋もありません。



ニホンカワトンボ (オス・メス)

5月から7月まで湿原に向かう林内などで見かけます。オスの翅には赤い紋が、メスには白い紋があります。成熟すると白い粉を吹きます。



ヤンマなど大型のトンボ

オニヤンマを筆頭に、池の上や堤の上空、畑の上空などを巡回している大型のトンボの仲間にはオニヤンマ科のオニヤンマの他、ヤンマ科、ヤマトンボ科、またサナエトンボ科のトンボなどが含まれます。

オニヤンマ科

オニヤンマ (オス・メス)

湿原や田んぼの水路、湿原に向かう遊歩道沿いに巡回していることが多い大型のトンボ。脇の草木にぶら下がって休むことも多いので、比較的観察しやすい。6月末から8月の暑い盛りがピーク。メスは細い流れの底に何度も腹部を突き刺して産卵します。幼虫の期間は3年から4年。



ムカシヤンマ科

ムカシヤンマ

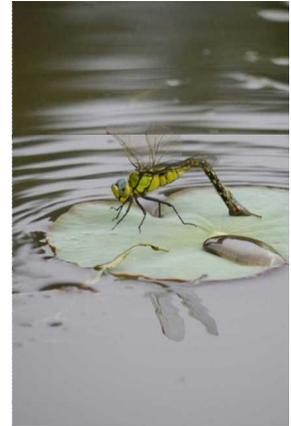
5月、6月頃に、湿原周辺や湿原に向かう遊歩道の傍らに、翅を広げて止まっている姿を見ることが多い。なかなか逃げないので、観察は容易。胸の前面が褐色で平滑な感じであるのが特徴。



ヤンマ科

クロスジギンヤンマ (オス・メス)

ヤンマの仲間で5月から飛び始めるのはクロスジギンヤンマです。小堤やゲンゴウロウ池などの上空を巡回し、また池で産卵をしている姿を見ることができます。筋の入った黄色い胸部に加え、オスは青い斑紋のある腹部が特徴です。メスは単独で水面下の植物に産卵します。



ギンヤンマ (オス・メス)

7月と8月はギンヤンマの季節です。クロスジギンヤンマと同じように小堤などで観察することができます。産卵はオス・メスが連結して行います。腹部は赤褐色で、黄色い斑紋はあまり目立ちません。胸部は黄緑色。



オオルリボシヤンマ (オス・メス)

8月に入り、オオルリボシヤンマが優勢になってきます。オオルリボシヤンマは胸部の2本の太い黄色の帯と腹部の模様で見分けることができます。止まっている姿をみることはほとんどありませんが、ホバリングすることも多いので、模様を判別することもできます。メスは単独で産卵します。



ルリボシヤンマ

他のヤンマより、湿原を好むように思われるのがルリボシヤンマ。8月から10月まで、湿原の小さな池を巡回している姿を見ることができました。オオルリボシヤンマとは腹部の模様で見分けますが、飛翔中に判別するのは難しいです。

2015年に確認できたヤンマ科のトンボは4種類でしたが、他にも数種類は生息しているのではないかと思います。



ヤマトンボ科

オオヤマトンボ

7月～8月にかけて、堤の水面を岸に沿って巡回している。止まっている姿を見ることがなかったため、写真に撮って、オオヤマトンボであることを確認。



サナエトンボ科

5月から7月ぐらいの早い時期に多く見られ、黄色に黒の胸部や、腹部の黄色い斑紋など、ヤンマの仲間と似ているところがあります。上空を巡回するより、地面や石の上に静止していることが多い。



コオニヤンマ

長い脚や小さな頭部が特徴。胸部の前面の模様などで見分けます。サナエトンボの仲間はぶら下がって止まることはありません。

コサナエ (オス・メス)



6月、7月と、葉っぱの上に止まっている姿を確認できました。

トンボ科

アカトンボの仲間など、よくみかけるトンボを含んでいます。ここでは、5月ぐらいから飛び始める種類から紹介していきます。

シオヤトンボ（オス・メス）

5月になってまず姿を見せるのはシオヤトンボ。米地区で腹部が白や青白い粉を吹くのは、シオヤトンボか、ハラビロトンボかオオシオカラトンボ。胸部が白と黄色であれば、シオヤトンボ。なぜかあまりメスを見かけませんでした。



ハラビロトンボ（オス・メス）

続いて、5月下旬には田んぼにハラビロトンボが現れます。腹部の白い色よりも、胸と目の黒い色が目を引きます。メスの腹部は黄色で、黒い斑紋が並びます。8月にはほとんどいなくなります。



ヨツボシトンボ

同じく5月-6月がピークなのはヨツボシトンボ。黄色い身体に、翅の模様で区別が付きます。オスメスの区別は難しく、写真で見てもよくわかりません。池の周りや休耕田でよく見かけます。



オオシオカラトンボ (オス・メス)

6月から7月にかけて姿を見せるのがオオシオカラトンボ。腹部先端に黒い部分があることや、翅の付け根に黒色の斑があること、翅の先端が褐色な点が特徴です。メスは腹部の付け根が黄色く、黒い先端が膨らんでいます。ここまでの3種に比べると林の周辺などを好むように思われます。



コシアキトンボ (オス・メス)

6月から8月にかけて、堤の水面上を岸に沿って巡回しているのコシアキトンボ。腰に白い帯を巻いているような姿が特徴的。メスは、腹部の付け根に黄色い帯を巻いていて、オオシオカラトンボのメスと似ています。



ショウジョウトンボ

7月に小堤に現れ、8月には姿を見せなくなっていました。名前の通り真っ赤なトンボです。翅の付け根だけが黄色く、腹部は赤いだけで模様がないことで後から出てくるキトンボと見分けます。メスは確認できませんでしたが、黄色い身体となります。



アカトンボの仲間（アカネ属）

ここからアカトンボの仲間になります。7月から10月までの間、体色を変化させながら、姿を見せ続けます。集落内から湿原まで、あちこちで観察できます。

ノシメトンボ（オス・メス）

7月から10月まで一番目立つのがノシメトンボ。翅の先端が黒いのが特徴。9月になると、オスの細い腹部の上面は赤褐色になってきます。オスとメスが連結したまま、田んぼの上を飛びかい、卵をばらまいていきます。



卵が見えますか？

リスアカネ

8月と9月に2回だけ見つけたトンボ。翅の先端が褐色なので、ノシメトンボと似ている。オスが成熟した時には、腹部全体が赤くなるのがノシメトンボとの違い。メスはノシメトンボと見分けるのが難しいようです。2回とも頼りない葉っぱの上に止まっていたのは偶然でしょうか？小型のアカトンボは、枝の先を大型のアカトンボに奪われ、低い葉の上などにいることが多い気がします。



上が8月、下が9月

アキアカネ (オス・メス)

7月に姿を見せた後、9月、10月は再び盛んに飛んでいました。連結して、水たまりに腹部の先を打って産卵している姿をよく見かけます。赤くなっても顔までは赤くならないのがアキアカネ。

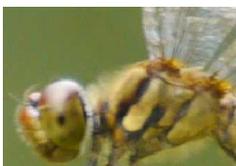


ナツアカネ (オス・メス)

アキアカネと同じく夏から秋のトンボ。オスは顔まで赤くなります。産卵は、ノシメトンボのように空中からばらまきます。



ナツアカネとアキアカネの見分け方



ナツアカネは胸部の黒い筋が直線的に切れる。



アキアカネは胸部の黒い筋の先が細くなる。

マユタテアカネ (オス・メス)

小型のアカトンボ。7月～10月まで観察できました。顔にある豚の鼻のような模様が特徴です。黄色い胸部にはあまり黒い模様はありません。近づくとも低めの草の上を転々と逃げていきます。



マユタテアカネ
顔面の模様と
反り返る尾部の
先端



ヒメアカネ
白い顔とオスの
尾部の先端

ヒメアカネ (オス・メス)

小型のアカトンボ。9月～10月まで観察できました。胸の黒い筋は細く、オスの顔は白く、オス・メスとも顔の斑紋はありません。尾部の先端は反り返らず、メスは産卵管が突き出ています。



キトンボ

9月、10月と確認できたキトンボ。池や小堤の周囲を好むようです。翅の半分ほどが黄色いことで見分けられます。オスの腹部上面は赤くなります。



ハッチョウトンボ(2013年)

2013年6月に撮影した写真です。2015年は確認できませんでした。国内最小のトンボで、一円玉ぐらいの大きさしかありません。オスは全身が赤くなります。



鮭川村米地区は、里、山、川そして湿原という多様な生態系に恵まれ、生物多様性を育むゆりかごとなっています。その中でも、伝統的な生業である稲作とそれを支えてきた堤 - 用水 - 田んぼという水利用のシステムが、トンボの生息に適した環境を保全してきています。さらに機械化に不適な湿田が、休耕田や、またゲンゴウロウ池として整備されたこともトンボの生育環境を提供することにもなっています。

この資料では、トンボを中心に紹介していますが、トンボだけではなく、様々な生き物が人間と共存してきています。

(トウホク) サンショウウオ



アカハライモリ(幼体)



トノサマガエル



シユレーゲルアオガエル

モリアオガエル



タゴガエル

ツチガエル



ニホンアマガエル

シマヘビ



マムシ



ヤマガガン



うずき



さつき



さつき



みなづき



ふみづき



はづき



ながつき



かなづき



